
ポケモンBW 黒き光と白き闇

アキラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモンBW 黒き光と白き闇

【Nコード】

N4451X

【作者名】

アクラ

【あらすじ】

ギンガ団壊滅から4年、プラズマ団壊滅から1年がたち、平和が続いていた。そんな中、ギンガ団とプラズマ団が手を組んだといううわさが流れるようになる…

さまざまなところに潜入調査し、依頼主にそこで得た情報を報告するスパイ。その中のスパイ組織の1つ“ローレンス”の一員であるソルがスパイ先で度々ギンガ団とプラズマ団を見るようになる…

ブローグ

「ここがイツシュ地方か。」

俺はソル。他人から見れば俺は普通のポケモントレーナーに見えるだろう。

プルルル… ポケギアか。

「俺だ。いま、イツシュ地方に着いたところだ。」

でも、俺はただのポケモントレーナーじゃない。

俺の本職はポケモントレーナーじゃない。

俺は、……………スパイだ。俺がイツシュ地方に来たのも、依頼のためだ。

「そろそろ着いた頃かと思ったよー。ところで、今どこの街にいるのー？」

「ヒウンシティというところの港だ。それで、依頼場所はどこにある？」

今、ポケギアにでたのはジリア。俺の幼なじみだ。

「ソルったら、せつかちなんだから。ちよつとぐらい観光でもすればいいのにー。」

「早く依頼を済ませたいんだ。それに観光なら、依頼が終わってからするつもりだ。」

「そうなのー。じゃあ、依頼場所いうね。6番道路にある、“フキヨセのほらあな”ってところだよ。今説明するのもあれだから、6番道路についたら電話してねー。」

6番道路か、確かホドモエシティからが一番近かったっけ

「分かった。着きしだい連絡する。」

「うん。じゃーねー」

ツー、ツー、

「よし、じゃあ行くか」

こうして、俺のイッシュ地方で初めてのミッションが始まった。

ブログ（後書き）

アキラです。

初投稿で、書き方とかよくわからないけど、応援して下さいったらうれしいです！

読んで下さってるかたありがとうございます！

第一話 フキヨセの洞穴へ

「えーと、ホドモエシティは、ここか。」

うわっ、結構遠いな（汗）歩いて行くのは無理か。となると、

「ここで飛ぶと人目につくから……ヤグルマの森かな。ここなら人あまりいないだろう。」

で、ヤグルマの森まで行こうとしたんだが…

（20分後）

「ここどこ（汗）」

俺は若干方向音痴な所があるんだよな（汗）しかもこの人ごみだ。余計迷う。ダメだ、誰かに聞こう（汗）

「ありがとうございます。」

やっとこれたよ（汗）どうやらヤグルマの森とは反対方向に進んでたらしい。

「改めて、行くか。」

「ヤグルマの森」

思ったより広いな、また迷いそうだ（汗）まあ、人がほとんどいないから動く必要もないんだか、

「出てこい、フワライド!」「フワーン」

腰につけたモンスターボールを投げ、赤い閃光とともにフワライドが出てきた。

「フワライド、ホドモエシティまで飛んでくれないか。」

そういつて俺は、イッシュのタウンマップを出した

「ここだ、分かるか?」「フワ〜」

フワライドはうなずくと俺に掴まれとアピールした
「OK。行こうか。」「フワーン！」

「ホドモエシティ」

「ここがホドモエシティか。（イッシュの玄関と呼ばれ、多くの品物が流通する港街）か。」

港街か、直接ここに来たらよかった（汗

「えっと、6番道路は…」

あった、今度はちゃんとポケナビ見ながら行こう（汗

「6番道路」

プルルル、プルルル、

ジリア「もしもしー」

ソル「俺だ、」

ジリア「あ、ソルー、遅かったじゃーん」

ソル「ヒウンシティ思ったより広いんだよ！で、フキヨセの洞穴はどこなんだ？」

ジリア「その前に！ちゃんと依頼内容覚えてる？」

ソル「ああ、フキヨセの洞穴に、最近妙な連中が出入りしてるから、そいつらをとつちめて欲しいんだっけ。」

ジリア「そうそう じゃ、洞穴の場所いうよー。えっとまず…」

（10分後）

「フキヨセの洞穴」

ソル「ありがとう。これから潜入を開始する。」

ジリア「頑張つてねー」

ツー…ツー…カチャッ

妙な連中か、こんなところで誰が何をやってるんだ
とりあえず進まなきゃ始まらないな

「行くか。」

俺は、少し疑問をいだきながら奥へ進んだ。

第一話 フキヨセの洞穴へ（後書き）

おわり方こんな感じでいいのかな

第二話 依頼遂行（前書き）

久しぶりの更新です（汗
時間かかった割に下手というねw

第二話 依頼遂行

「フキヨセの洞穴 2階」

「ここか、依頼主が言ってたのは」とりあえず奥まで来てみたんだが、見張りがいて、下手に近づけない。

「見たところ4人か……」

見張りは2人、なんとかなるか。

俺は見張りの2人の背後にまわり、首筋に手刀をかましてやった。

「がつ……………」

「なっ……………」

バタッ

まずは2人つと、

「誰だ！」

「なにをしている！」

ちっ、ばれたか。こうなったら…

「いけ、バクフーン！」

俺はモンスターボールを放り投げた

ポーン！「バクー！」

「バクフーン、ふんかだ！」「バク、バークー！」

俺が指示すると、バクフーンは背中 of 炎からあいつら足下に赤い光線を放った

「がはっ！」

「ぐはっ！」

「よし、全滅完了つと。バクフーン、ちょっと周りを照らしておいてくれないか。」

「バクッ！」

「ありがとう。さて、何かないかな……ん、」

ここの土、少し盛り上がりつつあるな。何か埋まってるのか？
俺はそこを掘り起こしてみた。

「これは……！」

宝石だ、それもたくさん！

こいつら盗人だったのか（汗
とりあえず、これで依頼完了だな。

俺は洞穴を後にした。

「ご協力、感謝します！」

「はい、頑張つて下さい。」

俺は洞穴から出たあと、とりあえずジュンサーさんに通報しておいた。

あいつらがのびてたままじゃ、どうしようもないしな

「さて、依頼も終わったし、帰るか。」

「ホドモエシティ　ホドモエ市場前」

ソル「……今回の依頼は完了だ。」

ジリア「OK、リーダーにそう伝えとくよ」

ソル「じゃあ、しばらくしたらそっちに戻る。」

ジリア「OK。じゃ、またねー。」ツー、ツー、

「さて、とりあえず休むか。」

俺はポケモンセンターへ歩いて行った

第三話 ライモンの友人（前書き）

いいタイトルが思いつかばん^^；

第三話 ライモンの友人

俺はポケモンセンターを出て、ライモンシティへ向かった

「これがホドモエの跳ね橋か・・・」

フワライドで飛んで来たから分からなかったが、

思ったよりでかいな（汗

「今は跳ね橋は下がってるみたいだし、さっさと行くか。」
俺はライモンシティに向けて足を進めた

【ライモンシティ】

「ここがライモンシティか。

バトルの聖地っただけあつてずいぶん広いな（汗」

また迷いかねないな（汗

「じつとしても仕方ないし行くか」

俺は待ち合わせ場所に向かった

~~~~~

・・・遅いなあいつまた道に迷ってるのか？

ソル「すまない、待たせたなニクス（汗」

あ、やっと来た

ニクス「遅いぞ、何してたんだよ。」

ソル「道に迷ってた（汗」

ニクス「またか（汗 お前の方向音痴なおらないのか？」

ソル「・・・そ、それより何だ話って」

ニクス「そうだったな。

実はお前にこれを渡せって頼まれたんだ。」

そして、俺は白い封筒をソルに差し出した

ソル 「頼まれたって誰にだよ？」

そう言いながらソルは封筒を開けた

ニクス「知らん。ポケモンセンターで頼まれたんだ。」

ソル 「そうか・・・、まあいいか、この手紙の内容を見れば分かる。」

そう言うソルは手紙を読み始めた

しかし、せつかくこいつを呼んだんだからなんかやりてえな・・・  
そうだ！

ニクス「おい、ソル！」

ソル 「何だ、いきなり。」

ニクス「なあ、いっしょにギアステーション行かねえか？」

ソル 「この地下鉄駅のことか。何でそんなところ行くんだ？」

ニクス「あそこはバトル施設でもあるんだ。

んで、そのリーダーがすげえ強いんだ。」

ソル 「で、いっしょに挑戦しよう。」

ニクス「ああ、そうだ。」

ソル 「・・・でも俺、今から手紙に書いてるところに行くんだが・  
・

ニクス「いいから行くぞ！」

ソル 「ちょっ！ニクス！」

俺はソルを（むりやり）ひっぱりながらギアステーションへ向かった

### 第三話 ライモンの友人（後書き）

今回は途中から主観変えて見たんですがどうでしょう？



## 第五話 サブウェイマスター登場！！（前書き）

すいません、遅くなりました（汗

3週間ぶりの更新です。

サブマスむずかしい・・・

## 第五話 サブウェイマスター登場！！

ニクスに（無理やり）連れて来られて  
今俺は、ギアステーションに来ていた。

ソル 「ニクス、雑過ぎるぞ（汗

それに、早くこの手紙のところに行きたいんだが・・・」

ニクス「堅いこというな。

それに船の出航の時間までまだまだなんだろう？」

ソル 「それはそうだが・・・」

ニクス「だったら早く行こうぜ。」

ニクスはそう言って足を速めた

~~~~~

ソル 「・・・ニクス、さっきから誰を探してるんだ？」

ニクス「サブウェイマスターだ。」

ソル 「誰だそれ？」

ニクス「さっき言わなかったか？

このマスターであり、車掌でもあるやつだ。

いつもここら辺にいるんだけど・・・お、いたいた。」

ニクスが歩いて行った方向を見ると2人の車掌らしき人が立っていた。

1人は黒、もう1人は白の車掌服を着ている

ニクス「よ、ノボリ、クダリ。久しぶり。」

ノボリ「これはこれはニクスさん。お久しぶりでございます。」

クダリ「久しぶり〜」

この二人がノボリとクダリか。

ずいぶん似てるな、双子なのか？

ノボリ「ところでそちらのかたは・・・」

ニクス「ああ、こいつはソル。俺の友人だ。」

ノボリ「そうでしたか。ソルさん、よろしくお願いします。」

ソル「こちらこそ。」

かなり丁寧なひとだな

そういえばあのクダリって人、「久しぶり」以外なにも喋ってないな（汗

ニクス「なあ、あいてるか？」

ノボリ「大丈夫でございます。どうぞこちらへ」

相当親しいんだな

俺たちはノボリにつれられて歩いて行った

~~~~~

しばらく歩いてたら一本の地下鉄の駅に着いた。

ソル 「ノボリさん、バトルをするんじゃないんですか？」

ノボリ 「はい、ここはバトルサブウェイと言って、車両の中でバトルができるようになっております。ここでバトルをするのでございます。」

ソル 「そうなんですか。」

ノボリ 「さ、皆さんご乗車ください。」

~~~~~

バトルするだけあってなかなか広いな。
それでも普通のバトル場よりはせまいか。

ノボリ 「さて、バトルの準備はよろしいでしょうか。」

ノボリ 「さて、改めて自己紹介させていただきます。

わたくしサブウェイマスターのノボリと申します。」

ノボリ 「隣にいますのは同じくサブウェイマスターのクダリでございます。」

ノボリ 「さて、ソルさんとニクスさん。

あなたたち2人が弱点を補い合うのか、はたまた圧倒的な力で押し通すのか、

何にせよあなたたちといいバトルが出来ると期待しております。」
ノボリ「それではクダリ、何かあればどうぞ。」

クダリ「ルールを守って安全運転！」

「ダイヤを守って皆さんスマイル！」

「指差し確認、準備オツケー！」

「目指すは勝利、出発進行！！！」

第五話 サブウェイマスター登場！！（後書き）

最後の方はゲームの台詞そのままです（汗

あと、今回は文と文の間隔を開けて書いてみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4451x/>

ポケモンBW 黒き光と白き闇

2011年11月21日12時11分発行